

ような場所とするため、内装に留意したこと。

- ・電話での予約受付が原則ではあるが、要望に対しては迅速に対応すべく、臨時の相談日を設けたりして柔軟に取り扱っていること。
- ・行政が実施していることで有利な点、例えば、立場の中立性・費用は無料など、を最大限生かしていること。
- ・医療機関ではなく、あくまでも相談室である点を前面に打出し、病気のイメージを払拭していること。

ここ数年間の実施実績の中で、目立った点をみてみると：

- ・相談対象者における女性の増加。特に40歳代において著しい。
- ・相談対象者を年齢別、男女別にみると、男性では20歳代、女性では40歳代にそれぞれのピークが認められる。
- ・相談内容は、心身不調の訴え、職場での人間関係、配転・転職・出向などが目立つ。
- ・予約の電話は自宅から掛ってくるものが殆んどであり、しかも多くは女性が申し込んでくる。
- ・個人ばかりでなく、企業や職場からの問い合わせもみられる。

なお、当相談室ではこれまでの実績をふまえ、「働く人のメンタルヘルス事例集」を発行したりして、心の健康についての啓発にも努めている。

5) 経過中に軽躁状態を呈した逃避型抑うつ の1例

福島 昇・田中 敏恒 (新潟大学精神医学)
飯田 眞 (教室)

エリートサラリーマンに見られた抑制が主体の逃避的色彩の強い抑うつ状態に対して、広瀬は「逃避型抑うつ」という概念を提唱し、その特徴として次のことを挙げた。物質的にも知的にも恵まれて育ち、葛藤の少ない生活史を送るため他人を押しつけて上に行きたいという欲望が乏しくなるが、一方で努力無しに対面を保ちたいという願望が強く存在する。発病は仕事の変化を契機とし、病像は抑制を主体とし、蒸発などの逃避規制が目立つ。そして病棟内では規範的な患者として振る舞う、などである。今回の症例は38歳男性で生活歴では一流高校を卒業後、一流私立大学に進み卒業後は地元の大手銀行に就職した。現病歴では、1983年春の父親の死、配置転換をきっかけとして抑うつ気分や意欲減退が出現し、そして

同年7月に失踪し11月末に発見された。その後、一時的に気分が高揚し教師を志したが手続きミスから断念し、それ以来、抑うつになった。1984年6月(29歳)再就職先に馴染めずにさらに落ち込むようになり再び失踪し、同年7月秋田にて保護された。N大学精神科を初診し、そのまま入院した。入院時は抑制が強く見られたが、抑うつ症状は徐々に改善し9月25日に退院した。1985年2月(29歳)現在の会社に就職し、その後は特に問題なく過ごしていたが、1992年6月(37歳)会社で部署の移動があり、同年10月頃から気分の高まりを感じ始めた。1993年1月第2子が生まれた。子供の命名をめぐる争いで夫婦関係が悪化した。その後6月まで気分がさらに高揚し、対人関係のトラブルが頻発した。また多弁、易怒性が見られ、金遣いも荒く、睡眠時間も減少した。そして同年7月頃(38歳)から気分が落ち込み始め、仕事のミスをきっかけに3日間会社を無断欠勤し、O病院心療内科を受診した。この時、躁うつ病の診断にて薬物治療を受けたが一ヶ月で通院を止めてしまった。復職した時には会社は業績不振のため仕事が無い状態で、通勤を辛く感じ始めた。そして12月13日会社に行くと言って家を出て、そのまま失踪した。失踪中、何度か自殺を考えたが結局、試みる事はなく12月25日に帰宅した。しかし既に妻子は実家に帰っていた。自分は無駄な人間であると考えてO病院で処方された薬物を大量服用し自殺を図った。同月29日自宅を訪れた母親に発見され1月4日N大学精神科を再受診し即日、入院した。入院時所見では軽い抑うつ気分と不安感がみとめられたが、礼儀正しく問題行動は見られなかった。本症例は「逃避型抑うつ」の概念を満たすものと考えられるが、特徴的と言えるのは、軽躁状態を示す時期が存在したことである。このことは、かつて単極性うつ病と退却性うつ病の中間的な病態として考えられた逃避型抑うつが、うつ病相には逃避機制を有しながら、躁病相を伴ううつ病へと変化する症例が存在することを示していると考えられる。今後、症例を積み重ねて、逃避型抑うつの意味を検討してきたい。

6) 一卵性双生児の精神分裂病不一致例

齋藤 功・佐藤 新 (新潟大学精神医学)
七里 佳代・飯田 眞 (教室)

発端者が就職後に幻覚妄想状態を呈した一卵性双生児の精神分裂病不一致例について報告した。症例は24歳の男性で、発症したのは兄(A)のほうである。弟(B)

は現在のところ精神症状の徴候はない。卵性診断は DNA マッピングにて行なった。

家系内に精神疾患の遺伝負因はない。父親は双子が高校2年の時に肺癌で死亡。母親は健康である。双子には兄がおり3人兄弟である。双子の出産は帝王切開で行なわれ、出生時ふたりとも仮死状態、体重はAが3100g、Bが1900gであった。

幼児期からふたりは、出生順位にしたがって、兄、弟として育てられた。Bのほうが体が弱かったため両親はAよりもBの養育に気を配った。Aは皆に迷惑をかけない模範的な子供で、目立たなく、非社交的であった。Bは少し落ち着きがなく、わがままではあるが、明るい子供で社交的であった。

Bよりも学業成績のまさっていたAは、高校卒業後、推薦で地元の大学に進学し、金融機関に就職した。一方Bは専門学校を中退して木工の組み立てや酒類運搬など肉体労働に従事している。

就職後Aは、職場で対人関係に悩み、強い自責感と自殺念慮が生じ、仕事に支障をきたすようになった。翌年の10月下旬「体の中に、沢山の人がいて話をしている、自分の名前を呼ぶ声がする」等の異常体験が始まり、「家ででの人格、会社での人格、病院での人格が分離している」とも訴えた。Aは11月に入院。Haloperidolを中心に処方し、症状は著明に改善した。翌年1月若干の残遺症状が認められるが通院可能な状態となり退院した。

検査所見では、脳波は、ふたりとも低振幅徐波が混入する異常を示し、頭部CTでは、Aに脳萎縮が認められたが、Bに特別の所見は認められなかった。ふたりのI.Q.はともに60(WAIS-R)である。Rorschach等の心理検査により、Aは自我機能の低下、精神内界の貧困化がうかがわれ、Bは細やかな情感が未発達で思考内容の幼さが目立っていた。

ふたりには、出生時の障害、出生体重、家庭内での位置付け、対人関係や社会適応、頭部CT所見、人格等に相違が認められる。今回われわれは、ふたりの生活史、病前性格、病歴、脳波、頭部CT、心理検査の結果を比較しながら、症例報告を行った。現在も治療を継続中であり、ふたりの不一致の要因については、資料がさらに集まった段階で、またあらためて分析する予定である。

7) 失踪と憑依をきたした1症例

矢走 誠 (柏崎厚生病院
精神科)
山田 治 (東大分院神経科)

症例Y. 17歳. 女性. 高校3年生. 成績は中位. 2人同胞の第2子で、父母、兄、祖父母、Yの6人家族。遺伝歴に特記すべきことはない。陽気で頭揚欲の強い性格であるが、目立つことは無く、やや不良がかった少数の友人がいた。

Yは、高校3年生になり「こっくりさん」をするようになった。夏休み中、同級生から「あなたのせいで、あなたの好きな人が退学した。」と言われ、塞ぎ込むようになった。登校日に「友達に会う。」と言って下校したきり、翌朝まで帰らなかった。帰宅時、失踪中の記憶は欠落していた。その後、再び塞ぎ込む毎日だったが、ある日、母に向い、常とは別の表情と声色で話し始め、数時間に亘り、「レイコ」、「タカシ」、「マサミ」と称する守護霊が交替で憑依し、Y本人を擁護し、母親を攻撃する内容の発言を続けた。

外来診察時、Yには守護霊達が憑依し、恰も、数人の人が会話しているようだった。

入院後、守護霊の「レイコ」は、Yの守護霊で何年も見守ってきたと女性的な声と柔らかな表情で語り、「タカシ」はYを気遣い扱いせず早く家に返すようにと男性の声音と恐れ表情で語り、「マサミ」は、幼稚な英語を繰り返していた。

Y自身は、母がYを家に縛り付けること(母に対する攻撃)、高校を卒業したら英語の専門学校へ行きたいこと(将来への希望)、好きな人にバレンタイン・デーにチョコレートをあげようとしたが断られ、夏の花火の日に町に行ったら彼と逢えるのではないかと考え何時間も町を彷徨ったが逢えなかったこと(失恋のエピソード)などを語った。

入院後加療により、守護霊の出現は徐々に減少し、約2週間で消失した。外出・外泊を経て、約7週間で退院となった。退院時も、失踪から入院までの間の記憶は不明瞭なままであった。

「こっくりさん」をしていたこと、Y自身が憑依している「守護霊」を認識していること、憑依しているものが動物ではなく「霊」であること、憑依がYの願望充足や葛藤解消の手段であることなど、日本の現代的な憑依の症例に合致していた。DSM-III-Rの「多重人格性障害」には合致したが、ICD-10の「トランスおよび憑依状態」や「多重人格障害」には合致しなかった。今後、